様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２５６０

研究課題名（和文）翻訳理論の展開と英語翻訳文学および世界文学の協働性についての考察

研究課題名（英文）Resarch on collaborative relations between translation studies and world literature in English

研究代表者
早川　敦子（HAYAKAWA, ATSUKO）

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：６０２２５６０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：翻訳理論の展開を21世紀から見直すことを通して、英語に翻訳されることでヘゲモニーを強化する一方で、英語中心主義にとっての「他者」の言語文化が「世界文学」の領域を拓いてきたことが明確になった。
　とくに翻訳理論の現在は、越境と多様性を特色とする世界文学を英語中心的な機軸からみるのではなく、脱中心化を促しながら、むしろ「翻訳の不可能性」を照射するものであることが明確になり、英語に翻訳された文学が翻って英語中心の価値観を覆しつつ世界文学の地図を更新していることが結論として明らかになった。
　この射程で日本文学の世界文学性を考察することが、今後さらに活性化されていく展望に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　「世界文学」が、移動と多言語多文化の越境性を特徴とする21世紀に注目を集めている中で、多くの作品は「英語に翻訳される」ことで認知されている現実を、翻訳理論の展開をたどることで検証した。その結果、英語中心主義が明らかに揺らぎ、英語に翻訳された文学は翻って「他者性」をヨーロッパを中心とするヘゲモニーの言語文化につきつけることで「キャノン」を解体し、世界史を修正している過程が照射された。こういった成果は、日本ではいまだなじみが薄い「翻訳理論」という研究領域の有効性を明らかにするという意味で学術的な意義をもつと同時に、世界の中の日本、また「日本語・文化」の本質をも問い直すことで社会的な意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：Transalation Studies as theory has been re-considered from the viewpoint of the 21st century, when English translation reconfirmed its hegemonic power over the others while the concept of "otherness" of the global cultures all around the world encouraged so-called "world literature" in the prephery against canon.
　Especially Translation Studies at present enthusiastically focuses on "untranslatability" in which litearture in English translation papradoxically undermines Euro-centric view of the world. World literature has been developed in the process of this movement. One of the productive prospects led by the project is the possibilities to re-evaluate Japanese literature from the view-point of these features that characterize world literature today in relation to Translation Studies.

研究分野：英語圏文学および翻訳論

キーワード：翻訳論　世界文学論　伝記文学　自伝　女性文学　マイノリティ　21世紀　日本文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　課題設定の背景は、先立つ基盤研究 C(平成 26 年～28 年度：課題番号 26370294)「21 世紀翻訳理論の展開と『歴史』再読についての考察」において、第二次大戦後の英語文学の作家たちが「他者」との直面を歴史の再読として表現するモチーフが見られることに注目し、それが「世界文学」の領域を展開する基盤になっていることを跡付けた。その成果を起点にして、「世界文学」という広汎な研究領域に「翻訳理論」からアプローチすることで、具体的な方法論を導き出すことが次の課題として照射された。

(2) とくに翻訳理論を援用することで、英語中心主義の解体が 21 世紀の英語文学の特徴として見られることと、「英語翻訳」を迂回することで「世界文学」の文脈に繋がるという、或る種の自己矛盾的な要素をどうとらえるのか、根本的な問題に取り組むことが必至であるとの認識に立ち、翻訳理論における「他者性」および「翻訳の不／可能性」という要素に着眼して世界文学の動向を意味づける研究を始動した。

２．研究の目的

(1) 21 世紀の特徴的「移動」や「越境」、「グローバリズム」が文学研究の領域でも注視されることで、「世界文学とは何か」という課題が浮上し、それが「翻訳理論」とどのような関係性を有し、またその相互関係が影響を与えているのかを明らかにする。翻訳を迂回することを必然とする世界文学は、翻訳理論の展開と密接な関係にあると考えるからである。その協働性を考察し、理論化することを目的とした。

(2) (1)に付随して考えるべき問題として、日本文学の英訳を世界文学の中でどのように位置づけるかということがある。ドナルド・キーン(Donald Keene)やアーサー・ビナード(Arthur Binard)などの英語母語話者による日本文学の英訳が「日本文学」を日本文化の独自性の表現として海外に紹介し、多くの読者を獲得している一方で、英語の翻訳的文体で多言語に翻訳されて「世界文学」としての注目を集めている村上春樹文学の本質は、むしろ共通性にあると言える。こういった海外における日本文学の受容のあり方は、「翻訳の不可能性／可能性」という、翻訳理論の重要なテーマを照射している。したがって、日本文学の翻訳を、「翻訳の不可能性／可能性」という観点から考察することも研究目的の射程に入っている。

３．研究の方法

(1) <u>世界文学論の枠組の設定</u>

広汎な領域にわたる「世界文学」を文学研究の領域でどのように捉えるか、世界文学論の動向を踏まえ、ダムロッシュ(David Damrosch)やモレッティ(Franco Moretti)らの先行研究の視座から、翻訳理論に繋がる諸要素を抽出する。その枠組を明確にした上で、具体的な作家や研究対象とする作品の分析を行う。

(2) <u>世界文学の本質の翻訳理論による考察</u>

世界文学の本質を「他者性の前景化」、また「英語中心主義への対抗言説」という観点に収斂させて捉え、その過程で必ず迂回する「翻訳」の問題を翻訳理論から考察する。具体的には、翻訳理論の展開を最新の議論まで追い、その過程で「英語中心主義の解体」を「翻訳の不可能性」から理論づける議論が、英語翻訳を前提としつつ翻って翻訳を通して英語中心主義への抵抗を示す世界文学の活性化と相互に影響を及ぼしあっている現象を考察する。

(3) <u>国内外での研究発表および研究者との知見の共有</u>

上記の研究の過程を経て得られた知見を公表し、国内外の研究者からのフィードバックを受け、成果の統括を行う。とくに海外の研究者からの知見を得ることにおいて重視したのは、日本文学の翻訳に関する問題である。翻訳の不可能性という要素とともに、英語中心主義に日本文学は翻訳理論から見てどう関わりうるのかを具体例として考察。作家としては、水俣病という、きわめて日本的な特徴が具現化された「病」を『苦界浄土』で著した石牟礼道子を取り上げた論考をもとに海外での翻訳学会で発表を行い(“Un/translatability of Michiko Ishimure’s Cosmology in Prose,”International Conference of EATS :East Asian Translation Studies)、石牟礼道子文学の「翻訳の不可能性」―たとえばチッソを巡る社会的な文脈、言語においては天草の方言、思想ではアニミズム的世界観など―が英訳によってどのような問題を照射しているか、また、どのように「世界文学」として受容されているかを検討。その翻訳理論的知見から「世界文学」の再定義に導く。

４．研究成果

(1) 成果と研究によって得られた知見

①世界文学と翻訳理論の協働性についての知見

多様な言語文化が表象されると同時に、言語を通してのアイデンティティに深く関わる世界文学は、政治的言説としての新たな「力」を以て現代社会のありようを照射するものである。たとえばホロコーストの第二世代にしてポーランドからアメリカ、さらにイギリスへと「移動」する経験をもつホフマン(Eva Hoffman)は、自身の「母語と祖国」の喪失体験を、人類の歴史におけるホロコーストという「断層」の体験と重ね、21 世紀の分断を作品の基盤においていると言える。このような作家は、翻訳理論においても、「翻訳の不可能性」をたえず言説化しているきわめて興味深い特徴を示しており、「世界文学」の本質を「他者性」に見る一つの流

れを形成しているという知見を得た。
　別の言い方をすれば、翻訳理論の活性化が世界文学とは何かという議論の拡がりに深く関わっていると言える。

②伝記・自伝文学研究の可能性
そのような知見から、さらにマイノリティの言説の特徴の一つとして、「自身を語る」すなわち自伝的な要素を挙げることができる。ここでさらに21世紀の「伝記／自伝」文学研究とのリンクが照射されてきたことは、本研究の大きな成果の一つであった。マーカス(Laura Marcus)をはじめとする研究者たちによるAuto/biographical Studiesは、「再記述」という翻訳理論のカテゴリーからも説明できる議論を展開しつつ、従来の「大きな物語」としての「伝記」が、ポストモダンを通過して「小さな物語」を掬い上げる文学に移行していることを明らかにしている。黒人文学やマイノリティの文学、そして女性文学は、「伝記／自伝」という形態から多様な展開を遂げてきた。本研究でとりあげた現代を代表する伝記作家ゴードン(Lyndall Gordon)の多くの伝記作品は―たとえばヴァージニア・ウルフ伝(Virginia Woolf)はその特徴的な仕事である―対象とする人間の伝記という形態をとりながら、時代の規範と個人の関係性を詳らかに言語化することによって、対社会の文脈で言語という権力を問い直す方法論で時代の再読を試みるものである。翻訳理論の展開と世界文学への注視とシンクロしながら伝記・自伝研究が活性化していることはきわめて興味深い知見である。

③英語教育における翻訳理論の可能性
大学教育における英文学を、上記のような学際的な視座と現代的課題を射程に入れて捉えなおすことは、単に「英語」の文学を読解するという従来の英語教育の枠を超えて「現代史」や「哲学」に拡がる可能性を示唆するものであると認識した。翻訳理論を英文学の読解と同時にカリキュラムに入れることは、「英語中心主義の解体」をも含む多文化多言語の現実を理解する上でひじょうに有益である。グローバリゼーションへの必要から、より英語教育が強化される中で、そもそも英語という言語はどのように社会で展開されてきたのか、その背景と今後の世界を考えることが求められている。そのような意味でも、世界文学と翻訳理論の協働性について考察した本研究から得られた知見を、大学教育のカリキュラムにも連動させる可能性に繋ぐことはひじょうに意味のあることであろう。

(2) 成果の意義と位置づけ
①成果の意義
上記で得られた知見は、とくに海外の研究者からのフィードバックや意見交換を通して、日本では依然として研究領域としては確立されているとは言えない「翻訳学」の有効性を再認識するものとなった。こと「日本文学」の翻訳の不可能性／可能性の問題は、日本文学が世界文学として認知されていく上での重要な要素でもあり、本研究の成果は、今後の学際的な研究の必要を裏付ける意義をもつものである。
また、上記③で指摘したように、大学教育における英文学研究の方向性として、研究成果の中でも中核をなす英語中心主義の解体および相対化の議論は、グローバリゼーションが加速化している現実において射程に入れるべきものであろう。
②成果の位置づけ
英語翻訳文学をふくむ英文学がもはや独自の限定的な領域では存在できないような拡がりをもつ「世界文学」の領域で展開されている現実において、他領域の研究方法との学際性を必要としていることから、研究成果の具体例としての翻訳理論および新たにその視座に入ってきた自伝／伝記文学研究は、その一端を担うものとして位置づけられる。とくに、そのような広汎な領域において日本文学の動向を世界文学の文脈で捉えることは、日本文学研究においても畢竟現代的課題として浮上するものである。日本文学研究における翻訳理論の援用も、そのような意味で今後の課題を示唆するものである。

(3) 今後の展望
本研究で得られた新たな知見としての伝記／自伝文学研究は、自己翻訳という要素では翻訳理論と、またマイノリティの言説によるキャノンの解体という意味では世界文学研究とリンクさせることによって、さらに広い研究の視座を拓くであろう。本研究では前出のゴードンを具体例に挙げて伝記／自伝文学の可能性に言及したが、今後の展望としては、現代作家の伝記および自伝を分析していくことで、世界文学の動向を読み解いていくことが課題の一つである。その中で、移動や喪失体験という、21世紀的な特徴がどのように捉えられているのか、言語的文化的移動とアイデンティティの問題がどのように「他者として自身を語る」自伝で追究されているかなど、文学の普遍的なテーマとともに現代に特有の問題が照射されてくると期待する。ひいてはそのような研究が、文学研究の意義に繋がっていくと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 早川敦子	４．巻 ５１
２．論文標題 越境する「命」の神話―石牟礼道子と翻訳の不/可能性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 津田塾大学紀要	６．最初と最後の頁 21-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） tsuda.repo.nii.ac.jp	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 早川敦子	４．巻 １１
２．論文標題 他者性を帯びた世界へ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大妻女子大学草稿・テキスト研究所所報	６．最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 早川敦子	４．巻 52
２．論文標題 「わたし」の所在―Lyndall Gordonのauto/biographyの試み	５．発行年 2020年
３．雑誌名 津田塾大学紀要	６．最初と最後の頁 33-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） tsuda.repo.nii.ac.jp	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 早川敦子
２．発表標題 シンポジウム　「世界文学へ向かう流れ：翻訳の理論と実践から」
３．学会等名 日本英文学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 早川敦子
２．発表標題 「他者性を帯びた世界へ―翻訳理論からのアプローチ」
３．学会等名 大妻女子大学　草稿・テキスト研究所（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 早川敦子
２．発表標題 Un/translatability of Michiko Ishimure's Cosmology in Prose
３．学会等名 EATS(East Asian Translation Studies)（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

翻訳（監訳）エヴァ・ホフマン『時間』（Eva Hoffman, Time）2020年6月、みすず書房より刊行予定

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考